

オトナ(6歳以上)が♂15頭♀48頭、5歳♂1頭♀6頭、4歳♂7頭♀7頭、3歳♂12頭♀4頭、2歳♂6頭♀14頭、1歳♂12頭♀6頭、0歳♂14頭♀16頭の計158頭であった。またA1群の周辺に頻りに姿を現わすは約15頭いた。1979年の分裂時の個体数は90頭であり、A1群は年8%程度ずつ総数が増加している。このままのペースで増加が続けば、数年のうちに再分裂が起こることは必至であろう。志賀A群は25年間以上にわたって個体識別に基づく詳細な人口学的資料の累積がなされている全国でも屈指の貴重な群れであるので、早急に今後の管理計画を案出することが望まれる。

なお2月下旬に、合同調査団(筆者を含む10名)がA1群の56頭を一時捕獲し、生体計測・採血等の総合調査を行ったことを付記する。

課題 2

交尾期におけるヤクザルオスの群間移動・移入・移出

竹門直比*・David S. Sprague(京大・理)

*旧姓 岡安

ニホンザルの野外研究は、主に餌付けされた孤立群において行われてきた。しかし、本来ニホンザルの群れは、他の群れと遊動域を接し、出合いの機会も多かったはずである。この他群との接触は、特に群れを移籍するオスにとって重要な社会的場面を作り出していたに違いない。本研究は、オスの移動が、多数群が存在する中でどのように行われているかを明らかにする目的で行われた。

屋久島の低地林には、ニホンザルの群れが遊動域を重複しながら、多数分布している。非交尾期の各群れの性比は約0.9で、離れオスも殆ど見なかったことから、オスの大部分が群れ内で生活していると考えられる。これが交尾期になると、調査対象の3群周辺に、識別されただけでも20~40頭('84・'85)の群れ外オスが出現し、活発に群間移動していることが示唆される。

群れ外オスの出現数を、対象群の1つM群について日別に見てみる。'84年秋は、10月下旬と12月初に増加し、顔ぶれも変化している。発情メスは10月下旬には、オトナメス8頭中5~6頭と急増している。12月初旬にはやや減少し(3頭)、代わっ

て隣りのH群の発情メスが7頭中3~4頭に増加している。この時は、M群に出現していたオスがH群で見られたり、M群の群れオスがH群を訪問したりしている。'85秋については、交尾期は前年ほど活発でなく、9・10月は発情メスは各群1~2頭、群れ外オスも0~1頭であった。11月中には発情メスは3~5頭に増加し、群れ外オスも複数出現した。12月にはいると交尾期はほぼ終了し、オスの移動もなくなってしまった。

以上の変化をみると、オスの群間移動のきっかけは、隣接群の発情メスの増加が重要と考えられる。発情メスは大胆で声も目立つし、一度に6頭も発情すると相手が不足し、群れから離れた発情メスが他群のオスの誘因になっていることは、充分に考えられる。

屋久島上部域にすむヤクザルの生態学的研究

好広真一(龍谷大・経営)、山極寿一、大竹 勝(日本モンキーセンター)、増井憲一(京大・理)

課題 3

本年度は採択なし。

課題 4

黒部川流域におけるニホンザル自然群の分布

赤座久明(大沢野中学校)、加藤 満(高蔵寺高校)

黒部川流域で、ニホンザルの分布調査を行った。調査の目的は、(1) 黒部川源流域のニホンザルの生息状況を現地調査し、群れの分布限界域を明らかにする、(2) 黒部川下流域で過去5年間継続して観察している17群についてのセンサスと遊動域の調査、の2点である。

(1)の調査結果

85年7月から10月にかけて、延べ24日間の調査を行った。調査地域は黒部川の源流地域で黒部川

と支流の東沢谷に囲まれた、赤牛岳(標高2864m)を中心とする約86km²の山域である。調査の結果は、サル直接観察が1例、糞の採集が8例である。直接観察したのは85年7月26日、場所は黒部川と東沢谷が合流する標高1500mの地点であった。観察したのは1個体だけであったが、この個体は警戒音を発していたので背後に群れがいた可能性が大きい。糞の採集地点もこの合流点の周辺である。そして、これより標高の高い地域ではサルの生息を確認することができなかった。山荘の管理人や登山者からの聞き込みでも、調査対象地域でのニホンザルの目撃例はなく、今回観察した1500m地点が黒部川流域の上流側における分布限界地域であると推定される。この地点は、ブナを中心とする落葉広葉樹林と、コメツガやオオシラビソを中心とする常緑針葉樹林との移行地域である。このことから、落葉広葉樹林の存在の有無は重要な分布の制限要因になり得ることが考えられる。

(2)の調査結果

積雪期には、黒部川の河原付近を遊動域にし、ここで越冬するため観察が容易になる。そこで'85年12月から'86年1月にかけて11日間の調査を行った。宇奈月温泉と関西電力猫又発電所の区間12kmを調査対象地域とした。これまでに識別されている17群中、今回の調査で群れの存在が確認できたのは8群であった。いずれの群れも個体数に大きな変動はなかった。宇奈月温泉の上流側に生息するON群は、60個体から成る流域中最大の群れであるが、この群れの遊動域が下流側に拡張していた。過去に別の群れで、遊動域の拡張→群れの分裂という例が観察されており、このON群でも今後群れが分裂する可能性が大きい。

奥羽山脈東斜面(宮城県側)に生息する野生ニホンザルの分布と分布の限定要因、群れの遊動と土地利用に関する研究

遠藤純二(万石浦小学校)

野生ニホンザルの生態学的な調査は各地で行われてきている。東北地方では下北半島、金華山島で継続的な調査が行われているが、内陸部の奥羽山脈一帯に生息する野生ニホンザルについての詳細な調査はこれまでに報告されていない。しかし、

下北半島、金華山島とも環境条件の異なる奥羽山脈一帯の野生群の分布や、彼らの生活のあり方を通して、東北地方におけるニホンザルの分布の限定要因を明らかにする道がひらけてくると考えられる。

このような観点から、研究の初年度である本年度は、アンケートと実踏により宮城県内の野生ニホンザルの分布調査を行った。また一方で、宮城県宮城町奥新川地域に生息する野生群を対象に、群れのハビチュエーションをすすめながら、個体数、構成、食性、遊動域とその季節変化、土地利用などに関する基礎データの収集を行い、同時に下北半島、白山、金華山島など他地域の野生群のデータと比較する作業を行ってきた。

その結果、宮城県のニホンザルの分布については、分布地域は大別して北上高地南部太平洋岸地域と奥羽山脈沿いの2地域に分けられ、現在、太平洋岸地域には金華山島にのみ群れが生息していること、また、奥羽山脈沿いでは中部以南に群れが連続して分布していることが明らかになった。

一方、奥新川地域には1群約70頭のニホンザルの生息が確認された。これまでにわかった遊動域はおおよそ80km²であり、これは奥新川とほぼ同緯度に位置する金華山島の野生群1群あたりの遊動域のほぼ10倍にあたる。また、春から秋にかけて分派行動が頻繁に観察され、遊動域の変更も観察された。特に遊動域の変更に関しては、アンケート調査による過去の遊動域から現在の遊動域への変化、同地域の植生、地形や気候などの環境条件、隣接群との関係を含め、現在データを分析中であり、今後何らかの結論が得られると考えられる。

下北半島の森林施業とニホンザルの生息環境

荻野和彦・二宮生夫(愛媛大・農)

青森県下北郡の大畑、大間、佐井営林署管内のブナ、ヒバ林において、1973年に施業区、無施業区に永久調査区を設け、森林施業とニホンザルの生育環境との関係を調査してきた。今回の研究では1985年11月に、7地点の永久調査区において再測定をおこない、約10年間にわたる林分構造の変化、林分生長量を調査した。

7地点の調査区における胸高直径の平均生長量は0.182 cm/yrであり、ヒバ林で0.138 cm/yrに対してブナ林で0.417 cm/yrとブナ林の方が生長